

図3 NT0402 記録例

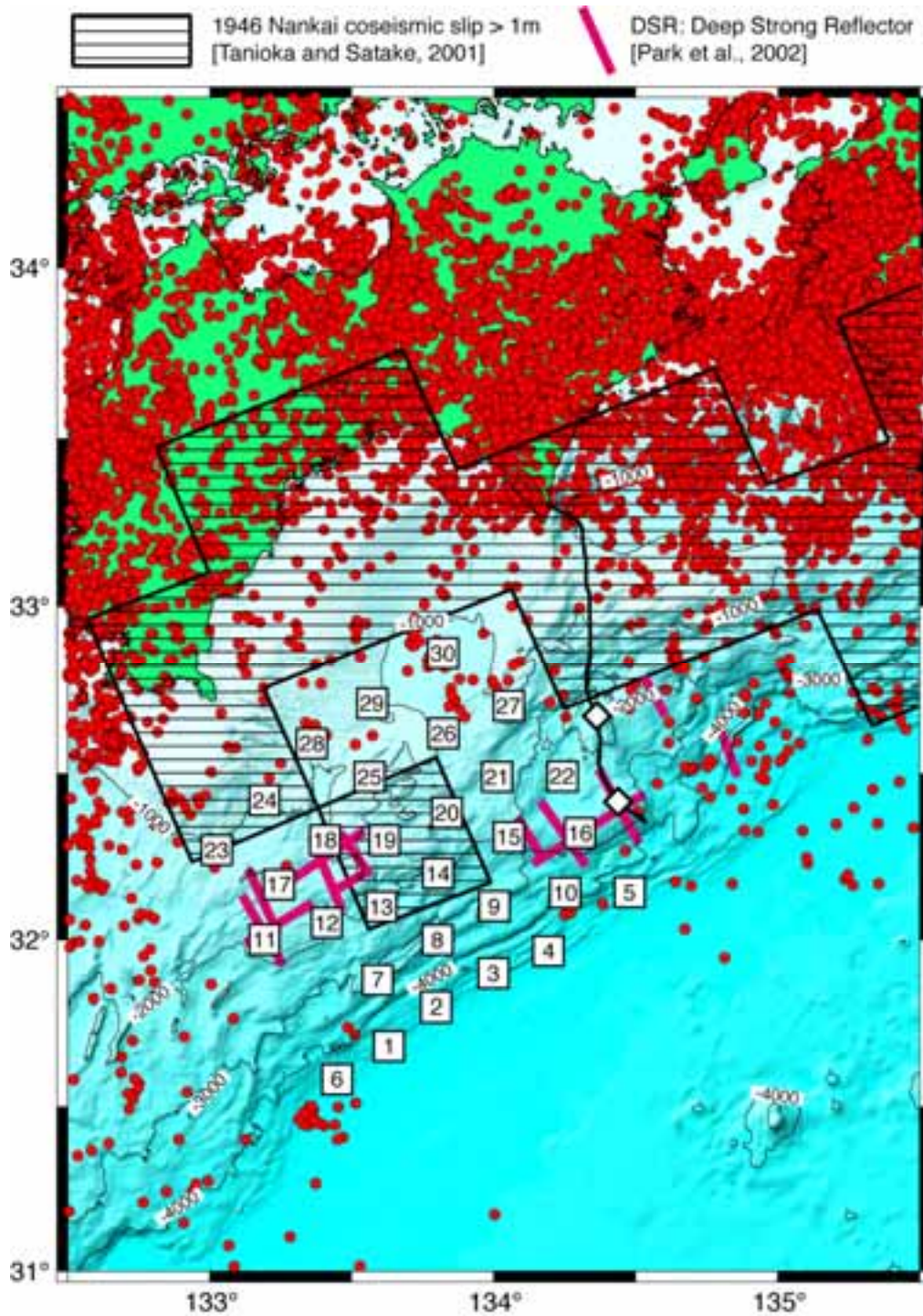


図4 高知県沖南海トラフの深さ60kmより浅い地震の震央分布。震源は気象庁による。津波波形から推定された1946年昭和南海地震の滑り量分布 [Tanioka and Satake, 2001] と、DSR (Deep Strong Reflector) [Park et al., 2002] を一緒に示す。

- : 自己浮上型海底地震計設置位置。数字は表1に示す観測点番号
- : ケーブル式海底地震計

表4 調査実績

3月8日	和歌山港出港
3月9日	調査海域着 海底地震計14台設置 位置決め 観測点番号 30, 29, 28, 24, 23, 17, 18, 25, 26, 27, 21, 20, 19, 11
3月10日	海底地震計9台設置 位置決め 観測点番号 12, 13, 14, 15, 22, 16, 9, 8, 7
3月11日	荒天待機
3月12日	海底地震計7台設置 観測点番号 6, 1, 2, 3, 4, 10, 5
3月13日	海底地震計7台位置決め 観測点番号 6, 1, 2, 3, 4, 10, 5 海底地震計設置作業終了 調査海域発
3月14日	回航
3月15日	海洋科学技術センター着岸

表5 自己浮上型海底地震計設置位置

観測点番号	緯度		経度		水深(m)
1	31°	41.04'	133°	37.90'	4870
2	31°	47.95'	133°	47.92'	4699
3	31°	53.97'	133°	60.00'	4645
4	31°	58.00'	134°	11.60'	4832
5	32°	8.60'	134°	28.71'	4788
6	31°	35.00'	133°	26.86'	4891
7	31°	52.82'	133°	35.48'	3057
8	32°	0.03'	133°	48.11'	3234
9	32°	6.06'	134°	0.11'	3188
10	32°	8.48'	134°	15.06'	3894
11	32°	0.05'	133°	11.57'	1669
12	32°	3.06'	133°	24.68'	2057
13	32°	6.02'	133°	36.20'	2144
14	32°	11.97'	133°	48.23'	2103
15	32°	18.57'	134°	3.19'	2096
16	32°	19.30'	134°	18.21'	2299
17	32°	10.03'	133°	14.58'	1282
18	32°	18.05'	133°	24.29'	1060
19	32°	18.03'	133°	36.88'	1296
20	32°	22.89'	133°	50.06'	1534
21	32°	29.43'	134°	0.71'	1734
22	32°	29.49'	134°	14.53'	2781
23	32°	16.18'	133°	1.54'	1142
24	32°	25.20'	133°	11.63'	797
25	32°	29.44'	133°	33.81'	973
26	32°	37.24'	133°	49.40'	1080
27	32°	42.08'	134°	3.20'	910
28	32°	35.44'	133°	21.64'	879
29	32°	42.58'	133°	34.32'	885
30	32°	51.65'	133°	49.28'	1052

(f) 成果の論文発表・口頭発表等

現在はまだ無し。

(g) 特許出願、ソフトウェア開発、仕様・標準等の策定

1) 特許出願

無し。

2) ソフトウェア開発

無し。

3) 仕様・標準等の策定

無し。

(3) 平成 16 年度業務計画案

(a) 広角反射・屈折法調査

東南海地震と南海地震の想定震源域の境界領域である紀伊半島沖において、海洋科学技術センター所有の研究船を用いて広角反射・屈折法による海陸統合構造調査を実施し、プレート境界面の巨視的な形状などの大構造の把握や、想定震源域と陸域の間の地震波速度構造の把握を目指す。

(b) 機動的地震観測

東南海・南海地震の想定震源域において、前年度に昭和南海地震の際のアスペリティがあると考えられている土佐沖に設置した短期型自己浮上式海底地震計の回収及び解析を行うと共に、昭和東南海地震の際のアスペリティがあると考えられている紀伊半島沖東部海域において短期型自己浮上式海底地震計による機動的地震観測を開始し、地震活動とプレート境界域や地殻の構造との対比を行う。